

令和元年度

第2回

地域自立のための「人づくり
・学校づくり」実践委員会

議事録

令和元年7月30日（火）

第2回 地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会 議事録

1 開催日時 令和元年7月30日(火) 午後3時から午後5時まで

2 開催の場所 県庁別館9階特別第一会議室

3 出席者 委員長 矢野 弘典
副委員長 池上 重弘
委員 片野 恵介
委員 白井 千晶
委員 杉 雅俊
委員 竹原 和泉
委員 豊田 由美
委員 塙 博
委員 藤田 尚徳
委員 マリ・クリスティーヌ
委員 宮城 聡
委員 山本 昌邦
委員 渡部 清花
委員 渡邊 妙子

知事 川勝 平太

4 議 事

- (1) 第1回静岡県総合教育会議開催結果
- (2) 生涯にわたり学び続ける教育の充実
- (3) その他

【開 会】

事務局： ただいまから第2回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を開催いたします。

本日は、お忙しい中、当委員会に御出席いただき、誠にありがとうございます。

私は、本日の司会を務めます文化・観光部総合教育局の伏見と申します。

本日は、加藤委員、清宮委員、仲道委員、藪田委員が所用のため欠席となっております。

それでは、開会に当たりまして、知事から御挨拶申し上げます。

川勝知事： 皆様、お暑い中お集まりいただきまして恐縮でございます。
第1回総合教育会議、令和元年になりましての第1回が6月18日にご

ざいまして、国内外で活躍できる人材の育成について、教育委員会の皆様方と御協議を申し上げました。今日は藤井さん、伊東先生、渡邊さんが来ておられます。5打数3安打です。大谷よりはるかに高いヒット率でございます。それで、この実践委員会からは矢野委員長に御出席いただきましてありがとうございました。

詳しい御報告は後にあると思いますけれども、第1回実践委員会で皆様から頂戴いたしました意見、例えば「ラグビー観戦に招待した児童・生徒が世界的イベントを途中帰宅することなく最後まで観戦することは基本であるが、個別の事情を持つ子供もいるので、それぞれに配慮が必要であること」、また「効果的な身近な国際化として、県内の高校に留学生を受け入れることはできないか」、また「海外で得た経験を教育現場で生かし、子供たちにとってもよい学びになるので、青年海外協力隊への現職教員の派遣制度をもっと活用するとよい」といったようなこと、こうしたことが教育委員会で提案されまして、その結果、実践委員会の御意見に教育委員会から御賛同いただきました。具現化に向けて、それぞれの執行機関で責任を持って取り組んでいくことが合意された次第でございます。

本日は「生涯にわたり学び続ける教育の充実」、それはもう当然ですね。生涯勉強ということでございますけれども、大事なことは才徳兼備ということではないかと存じます。人生100年時代と、死ぬまで勉強ということで、生涯の様々なステージに必要な能力をいかにして着実に身につけるかと。また、死生観もいかに身につけるかということも大事ではないかとあわせて思いますけれども、これは今日のテーマではないかもしれませんが、そうした潜在的な能力を開花させるということが指導者の役割であり、また自分からも精進の過程で自らを開発するということが大事だと思っておりますけれども、委員の皆様のお意見も賜りたいと思っております。本日も活発な議論をよろしくお願い申し上げます。

事務局： ありがとうございました。
 それでは、議事に入りたいと思います。
 これからの議事進行は、矢野委員長にお願いいたします。

矢野委員長： 皆さん、こんにちは。
 やっと梅雨明けになりまして、さっぱりした気分なのか、いや、これから大変だと思うのか色々ですけど、今こういう時期に遠くからお運びいただきまして、本当にありがとうございました。どうぞよろしく願いいたします。

 それでは、次第に基づきまして議事に入りますが、まず第1回の総合教育会議の開催結果について私から御報告したいと思います。

 一番大事なところは知事からお話があったとおりのので、私の申し上

げることが重なるとは思いますが、資料もありますので、御参照いただきながら、会議の様相について御報告申し上げたいと思います。

本日の資料1といたしまして、開催結果が配付されております。その4番目に議事がありまして、国内外で活躍できる人材の育成、それから実践委員会では議論しませんでした。全国での子供に対する事件や事故を受けまして、子供の安全対策の強化について協議をいたしました。

国内外で活躍できる人材の育成につきましては、資料の3ページを御覧いただきたいと思っております。ここに第1回総合教育会議の論点がございますが、前回の実践委員会で議論した論点と同じでございます。

また、委員の皆様からいただいた御意見を実践委員会の意見としてまとめまして総合教育会議に提出した資料が、資料の4ページから7ページまでにわたっています。

なお、5ページ以降の委員の皆様のお意見をにつきましては、発言者の氏名の記載を除いたものを総合教育会議では配付いたしました。

この資料に基づいて実践委員会の意見を述べたわけですが、その結果、出席者からは、資料の1ページの5.出席者発言要旨に記載のあるとおりの発言がございました。

まず、論点1の国際イベントの開催に伴う国際交流を通じた特色ある教育の推進に関する意見として、次のような意見がございました。

ラグビーワールドカップにつきましては、先ほど知事からお話があったように、最後まで観戦するというのが基本ではあるが、いろいろと例外的な個別の措置が必要である。そういう場合に、本当にまれな機会がありますから、海外の一流選手やチームの意識や考え方を学ぶ機会として活用すべきである。

ラグビー授業は、先生方の負担とならないよう、派遣された選手に進行等を任せたいほうが良いのではないかと。実際に、現役の選手たちが学校を訪ねまして、子供たちに解説をしたという、今までにない試みがなされたと私は思っています。

ラグビー観戦に招待した児童・生徒は、試合終了まで強制的に残す必要はないのではないかと。また、試合終了まで観戦した場合は、小学生を最初に退場させるなどの混雑を避ける工夫が必要である。

また、ラグビー観戦については、子供たちにどうしたいのかを徹底的に議論させて、対応していけばよいのではないかなどのお意見がありました。

また、国際交流についての意見といたしまして、留学生の受入につきましては、空き家をシェアハウスとして利用して、地域の方々に面倒を見てもらうのが良いのではないかと、そういう意見もございました。

また、小・中・高校全ての学校で姉妹校を持つようにしてはどうか。

静岡県には、外国生まれ・外国育ちの家族がたくさん生活していることから、そうした方々との交流を大切にしたい教育を進めてはどうかという意見がありました。

また、教員に対する取組として、多様性に不可欠なディベート力や発言力等を子供たちに身につけさせるためにも、教員の意識改革や国内外での研鑽にさらに力を注いでいく必要があることや、教員の国際化のため、青年海外協力隊への現職教員の派遣制度をもっと活用すると良いという意見がありました。

また、ふじのくに地域・大学コンソーシアムを活用して、イベント等を通じた留学生との交流など、新しい形を築くのが良いのではないかとこの御意見がありました。

次に、論点2. 県立高校における魅力ある教育環境の充実に係る御意見でございます。

新構想高校への改編については、選択肢は必ずしも一つではない。統合して成功したケースもあれば、そうではないケースもあることから、弾力的に対処していく必要があるということをお話ししました。

人口が減り、学生・生徒の数が減ると、1校では学校として成り立たないという事態は十分想定されるわけでありますから、それを近くの学校と統合して、そしてより高度な教育が行われる、教育を充実させるというのは大きな選択肢の一つであると思っております。

しかし、そういった画一的な取組だけが全てではなく、先ほども少し触れましたが、多様性という要素も十分考慮して、選択肢を柔軟に検討するということが必要なのではないかと思っております。

この高校の再編につきましては、先日、伊東地区の対象校を何名かの委員と視察して参りましたことから、後ほど御意見をいただければと思っております。後ほどいただいた御意見を次回の総合教育会議で報告し、また、御意見に基づいて皆様の御意見も賜りまして、それを次の総合教育会議に諮り、報告していきたいと思っております。

次に、子供の安全対策の強化についての御意見を紹介します。

児童・生徒の登下校時の見守りに近隣の民間企業の力を利用できないか。また、引退した人を交通指導員として活用するなど、地域コミュニティで問題を解決すべきという意見がありました。

子供にとっては、自動車だけではなく、自転車による事故も大変危険なので、道路に自転車専用道路のカラーリングをしてもよいのではないかなどの意見もありました。

このほかにも多くの意見が出されましたが、主な意見を御紹介させていただきます。

会議全体を通じまして、教育委員会の皆様に実践委員会の御意見を受けとめていただきまして、同じ方向性を共有することができたと感じております。本日の委員会にも総合教育会議、教育委員会の皆様、重鎮の先生方がこうしておいでいただいているという、それが何よりの証拠であるというふうに思っております。心を一つにして、この静岡県の教育改革を進めるといふ非常にシンボリックな形ではないかと思っております。大変歓迎している次第であります。

それでは、前回の実践委員会、総合教育会議の議論を踏まえたラグビーワールドカップの児童・生徒への観戦への対応について、事務局から説明をお願いします。

事務局：事務局を務めます総合教育課長の和田と申します。よろしくお願いいたします。

ラグビーワールドカップ2019小・中・高生観戦招待における観戦時間等について、事務局から報告いたします。

別冊の参考資料の1ページを御覧ください。

ラグビーワールドカップの児童・生徒の観戦につきましては、前回の実践委員会や総合教育会議でも数多くの御意見をいただきました。御指摘いただいた内容を踏まえ、各参加校に対し、教育的効果を高めるため、児童・生徒の安全確保を前提とし、できる限りの試合終了までの観戦の検討を御依頼いたしました。

また、児童・生徒の安全確保のための措置として、引率者数の割合について、当初は1割でございましたが、最大4割まで増員することといたしました。

また、前回の実践委員会でいただきました御意見への対応として、ラグビーワールドカップの開催意義等への理解を深めるとともに、将来社会へ出た際に必要となる事業の企画、調整、マネジメント等を学ぶ機会を提供するため、高校生によるラグビーワールドカップ2019大会運営研修を実施することとし、7月13日から開始いたしました。

以上で事務局から報告を終わります。

矢野委員長：ありがとうございました。

ただいまの事務局からの説明、あるいは私から報告した総合教育会議の結果につきまして、何か御意見や御質問がありましたら御発言をお願いしたいと思います。

では、藤田さんからお願いします。

藤田委員：1の(1)の①に「教育的効果を高めるため」と書かれておりますが、この「教育的効果」とは具体的にはどのような効果なのかを教えてくださいませんか。

矢野委員長：事務局からお願いします。

事務局：スポーツ担当部長の広岡から御説明させていただきます。

大きく特にラグビーの精神というのが5つございまして、品位、情熱、結束、規律、そして最後に尊敬というラグビーが大事にしている精神がまずございます。そういったものから波及いたしまして、ワン・フォー・オール、オール・フォー・ワンでありますとか、あるいはノーサ

イドの精神、こういったものがラグビーにございます。私どもとしてはラグビーの授業という形で小学校、中学校の皆様には教本を作りまして、まず座学という形で勉強させていただきました。

その座学の後、さらに実際に試合を見ていただくということで、観戦勧奨ということをはじめているところでもございまして、そこで座学で学んだものを実際に現場で見ていただくということで教育的効果をさらに高めていくということで考えているところでもございます。以上でございます。

藤田委員： 前回のときに結構ポイントになっていた部分というのが、試合終了までというところをどうするかというのが大きな論点になっていた中で、今回、先ほどおっしゃったところの座学でやった部分が最後までいることでどう達成できたのかということを検証されないと、結局最後までいても途中で飽きてしまったりとなってしまうので、最後までいたことによって得られる効果ということをしかりと落とされて、子供たちに伝えて、なおかつ、この間少しお話しさせていただいたのですが、効果測定、結局やったといえども嫌になってしまったとなっても嫌ですし、本当にアンケートぐらいでいいと思うのですが、これをやったことで世界的な基準を見ることができて、自分も挑戦したくなったとか、興味を持ったとか、何かプラスにしかりと落とせるように、効果測定までやった上で最後まで見るということをぜひとも追求していただければと思いました。よろしく願いいたします。

事務局： 御意見ありがとうございます。
おっしゃるとおり、最後まで見ていただくことによって、最後のどんでん返しがありますとか、あるいは試合が終わった後の、先ほどの精神の中にもありましたように、品位でありますとか尊敬ということも、試合が終わった後、いわゆるノーサイドの中で選手同士がお互いをたたえ合うというようなところも実際ございますので、そういったところもしかり見ていただけるような形のものであり、そしてこの結果として、例えばアンケートでありますとか、そういった形の中で子供たちがどのように感じたのかということをしかり把握していきたいと思っております。ありがとうございます。

矢野委員長： 池上先生、どうぞ。

池上副委員長： 私は、むしろ個別具体的なところについて4点お伺いしたいと思えます。

まず1点目は、このページに書いてある引率者の数を増員するというものの意味です。「引率教員」ではなくて「引率者」という言葉を使っているのは、PTAの方々などを含めて言っているのか、これが1点で

す。

それから2番目、私はエコパのごく近くに住んでいて、普段あそこをジョギングしているので土地勘があるのですが、バスをどの辺にとめるのか。エコパのバスをとめる場所は駐車場の一番奥なんですけれども、それをうまく調整できると退出がスムーズに行くのかなと思います。逆に、子供たちが出たときにちゃんとバスが近くにいないと、結局渋滞に巻き込まれて、エコパを出るときの交差点で時間がかかってしまうという恐れがありますので、駐車、あるいは誘導をどうお考えになっているのか、これが2点目。

それから3点目が、宿泊を伴う学校はあるのかどうか確認をしたいです。

4点目が、各対戦の見学をする学校は、対戦国についてどのような学びをしているのか、あるいはする予定なのかというところをお伺いしたいと思います。

以上、4点です。

矢野委員長：事務局のほうからお願いします。

事務局： それでは、スポーツ担当部長の広岡のほうからお答えさせていただきます。

まず引率者でございます。

そもそもこのラグビー観戦ということをやるとなると、学校の協力が非常に大事だということで、学校に負担を強いる部分がございます。そういった中で、働き方改革という中で教員の方々の負担をいかに減らすかというような問題もございましたので、当初1割ということ、これを4割、あるいは2割、4割という形で増やすことに当たりまして、先ほど委員がおっしゃられたように地域の方、学校の先生だけではなくて、地域と一緒に学校を盛り上げていただいている方々、こういった方々もその対象といたしましたということで「引率者」というような言葉を使わせていただきました。実際そのような方々も今回御協力いただけるというようなことは伺っております。1点目でございます。

2点目でございます、バスの駐車位置の調整でございます。

ラグビーワールドカップにつきましては、国際大会ということがございまして、基本的には会場のもろもろのものについては組織委員会というところが調整しているところでございます。そうした中で、どうしても遠くなってしまう駐車場所につきましては、特に学校につきましては、近くの駐車場にとめていただけるような状況を今進めております。そういった中で、できるだけ子供に負担がかからないようにするでありますとか、あるいは周辺の近くの道路をそのときだけ交通規制をかけさせていただいて、駐車場にはとめられないけれども、バスを近くの道路にとめるというような形で、結果的には近くにとめるような形の対策を

とりたいというように考えているところでございます。

それから、宿泊を伴うところがあるかということについては、今の状況の中では宿泊があるということは伺っておりません。

それから、4つ目の対戦国に対する勉強ということ、これは非常に大事なことだと思います。それぞれの学校におきまして、学校の授業の中で事前に勉強する中で、どのような国が来るのかというのは、先ほど申し上げました「ラグビー教本」の中でも書き込んでございます。そういった中で学習していただいて、それを現場で生かしていただくというような形をとっているところでございます。以上でございます。

矢野委員長： 渡部さん、お願いします。

渡部委員： 1ページ目の2の大会運営研修についての質問をさせていただきます。

こちらは選抜の20名の生徒が選ばれると思うのですが、研修という形が、企業研修でも相当な工夫を重ねないと主体性のない研修になってしまうということが、少し危ういところかなと感じました。主体性を引き出すためにどのような工夫をしていて、どなたがこの研修というものの中身を作っていくのかということについてお伺いしたいです。

大会概要の説明と見学と報告ということで、そこに書かれている企画、調整、マネジメント等を学ぶ機会というのは見ているだけだと学べない、私たちも色々な見学を小・中・高の時にしてきたのですが、どうしても記憶になかなか残らない、お客さんとして見るものになってしまったものが思い出すだけでも幾つもあつたなと思いました。見ました、やりましたということだけではない、主体性を育むような研修の工夫についてお伺いできたら幸いです。

矢野委員長： 事務局からお願いします。

事務局： ありがとうございます。

この研修につきましては、表に記載のとおり①から⑥回までで、20人の生徒がなかなか同じ日に集まりにくいということもございまして、まずは2つに分けさせていただいて、10人・10人程度に分けさせていただきました。そういったことで、20人でやるよりは10人・10人になった方が逆により濃度が濃いものができるかなと思ってございます。

そういった中で、①と②はどちらか、③と④はどちらかということで、最後の⑤、⑥はそれぞれ受けていただくということで、1人について4回実施するような形になってございます。

まず1回目につきましては、大会概要の説明ということで、県の職員が、まずラグビーワールドカップというものはどういうものかという概要を説明させていただきました。その中で、ラグビーのトップリーグのヤマハの選手にも来ていただいて、実際のプレーなどもその場で見せて

いただきながら、概要を学ばせたところでございます。

それから、エコパの視察ということで大会会場を、実際今度は会場を見るということが大事ですので、大会会場のほうにつきまして、私どもの職員と、あと現場にも組織委員会の職員がいますので、そういった現場の声と、私どもの職員のほうから会場の説明と視察をさせていただいております。

それから、次の5番目、6番目は、特に5番目につきましては実際の日本戦の試合でございます。実際の試合をやはり見ていただくということが非常に心に残る研修になると思っておりますが、ただ実際の試合になりますと、非常にレギュレーションとか厳しい、簡単に色々なところへ出入りはできにくいという、残念ながらそういったマイナスの部分もございしますが、実際の現場をできるだけ見られるような形で対応したいと考えているところでございます。

最後の12月8日、予定ですが、最後はしっかりこの4回の研修の中で得られたものをもう一回まとめるというような形で対応していきたいと思っております。以上です。

渡 部 委 員： ありがとうございます。

 一番の目的が、企画、調整、マネジメントを学ぶということという理解でよろしいですか。

事 務 局： やはり今後社会に出ていく中で、色々なものを企画する、それから調整する、マネジメントするということを研修を通して、あわせて実際に職員がその作業をやるところを見させて、ただ講義するだけではなくて、現場で県の職員がこういう調整をしている、こういう対応をしているというのをおわせて見せながら、実際のものを見ていただこうかなと今思っております。

渡 部 委 員： ありがとうございます。

矢 野 委 員 長： 杉さん、お願いします。

杉 委 員： ただ今の件は、私が提案したものなんです。前回の会議の中では話す時間がなかったので、是非こういうことも考えてほしいと会議後にペーパーで依頼したものです。

 社会へ出ると、色々なことを企画して、自ら運営に関わって、失敗を繰り返しながらも実践していくということが多々あるわけです。世界大会を運営することを見られるというチャンスは滅多にないので、是非この大会を活用し、どんな難しい課題をどのようにクリアしようか決めて、当日何がうまくいって何がうまくいかなかったのか、こういうことを肌で感じさせたいということでお願いしました。

その結果ここに引き上げていただき、感謝申し上げます。大会当日は係の人は大変忙しいので、運営状況を見るだけになろうかと思うのですが、是非大会が終わった後に、先ほど私が申しました、こうやってやろうとしたけれども、ここはうまく行って、ここはうまくいかなかったとか、ここが思わずうまくいったとか、ボランティアの人はこんなことで動いてくれて感謝の気持ちがたえないだとか、そういうことを伝えてほしいとお願いしたものであります。是非良いものにしていただきたいと思います。

渡部委員： きっかけとして素晴らしいと思います。ありがとうございます。

矢野委員長： ほかにいかがですか。

前回の実践委員会の論議を踏まえて、事務局が非常に熱心にいろいろ施策を講じていただいたことに感謝したいと思います。

やはり超一流の選手のプレーを最後まで見るという、それは本当に素晴らしいことです。私は個人的に思うのですが、ラグビーは終わった後、物すごく激しい戦いの後で、最後のホイッスルが鳴ると敵も味方もなくなるのです、ノーサイドと言うそうです。ああいう雰囲気も子供たちに見てほしいと私は思うのです。戦うときは真剣勝負、終わったら友達だと、これを世界の一流の選手たちがごく自然に振る舞うわけですね。そこまで本当は見たいと。それが原則としてやっていただきたいことの一つなんですね。

お芝居でも音楽でも、やはり最後まで見ないと分からないことってあるんですね。音楽の場合は思いもかけず素晴らしいアンコールを弾いてくれたりするわけですね。私もSPACを時々拝見しますが、終わった後で、それはもう本番の時の真剣味というのは肌でひしひしと感じるわけですが、終わった後でみんなそろって出てきて観客と交流すると、あるいはSPACの場合、終わった後で出口のほうへみんな役者さんたちがそろって、興味のある人たちと交流する、こういうところを味わってほしいと思うのです。

一流の芸とか一流のプレーというものが我々と身近なところにあるというところ、そういうことを感じてほしいと思いましたので、余り規律で固めて見学するのではなく、なるべく多くの人に最後まで見てもらいたいという、議論になったのはそういう理由なんですね。ですから、事務局の皆さんはよく頑張っていたと思いますので、ぜひともこれを成功させていただきたいと思います。

では、ほかにないようでしたら、先日、新構想高校の対象校となっている伊東地区の高校を視察して参りました。

最初に、その新構想高校について、構想の中身について事務局から説明をしていただきまして、その後で現地を見ていただいた先生方から感想を承りたいと思います。

それでは、事務局、お願いします。

事務局： 伊東地区新構想高等学校について、事務局から御説明いたします。
参考資料の2ページを御覧ください。
「ふじのくに魅力ある学校づくり推進計画」では、その計画の中で新構想高等学校計画を示しています。
そのうち伊東地区につきましては、3ページに記載のとおり、伊東高校、伊東高校城ヶ崎分校、伊東商業高校が対象校となっております。
2では対象校3校の募集定員や学級規模などの概要比較を示しており、現在、伊東高校城ヶ崎分校には東部特別支援学校伊豆高原分校が併置されております。
現在の取組状況としましては、令和5年度改編を目途に、昨年7月から同窓会等の関係者と意見交換等を開催しております。
4ページを御覧ください。
意見交換等の開催状況を示しております。様々な形で意見交換会を行い、地元の方たちの意見等を聞いております。
また、5ページ、6ページは新構想高等学校の検討案の概要を示しています。
今後も地元の方たちの意見等を確認しながら、具現化に向けた調整を進めてまいります。
以上で事務局からの説明を終わります。

矢野委員長： それでは、先だって伊東地区を御視察されました杉さん、片野さん、竹原さんから、それぞれの御感想をお聞かせ願いたいと思います。その後で皆さんの御意見を伺いたいと思います。
杉さん、どうぞ。

杉委員： 先日、矢野委員長とともに視察させていただきました。
商業高校と普通高校が一緒になったという意味では、昨日甲子園に向けて戦った駿河総合高校に一つ好事例があります。今、普通高校は特色を出すことが求められている。そういう中で、伊東商業高校は大変パソコン能力に長けている。全員がブラインドタッチで打てるそうです。それから、疑似経営体験授業というのもあって、パソコンを通じて色々なやりとりをする、こういうものを普通高校の中にもうまく取り込んでいくことで、いい特色を出せるのではないかと思います。
ただ、校舎の問題がありまして、伊東高校OBの人はうちのほうでと言うし、伊東商業のほうは、いやいや、うちでと、こういうところはあるわけですが、伊東高校は周りが傾斜地でありまして、昨今の全国で起こる集中豪雨等のことを考えますとやはり危険度が高いということで、伊東商業のほうになるということで進んでいるようです。
伊東商業のほうも敷地が広大にあるのならばどうにでもなるんです

が、そうでもないところがありますので、建物の工夫をうまくしていただいで対応することがよろしいのではないかと思います。

それから、城ヶ崎分校ですけれども、私は全く知らなかったのですが、アートにおいては日本有数の高校だということで、漫画甲子園、版画甲子園で常に全国トップクラスにいる学校であります。この特色をどんどん生かしていただきたいと思うのですが、残念ながら人数が今そこに載っている97人ということで、縮小していくとちょっと自立が大変かなと。すぐに伊東高校、伊東商業と一緒にするのではなくて、時期を見ながら一緒にしていくのが良いのではないかと思います。それも結局、伊東商業、伊東高校にとっても良い結果を生むのではないかと思います。

また、併設されている伊豆高原分校ですが、弱者の人たちと一緒に学ぶということは共生・共育で大変意義が深いので、これも最終的に一緒になるということは大変意義があると思いました。以上です。

矢野委員長： ありがとうございました。
 それでは、片野さん。

片野委員： 前回は会議を急に欠席してしまいまして申しわけありませんでした。その日は、私ごとですけれども第2子が誕生いたしまして、皆さんがちょうど着座されるころに、僕はへその緒を切っておりました。さすがに来られないということで、済みませんでした。

ほとんどの意見、杉委員からお話をさせていただいたとおりでして、僕自身も城ヶ崎分校に関して特に、思わずその副校長先生に口をつけて出てしまった言葉が「この高校は残したいですね」と。本当は言ってはいけないとは思ってはいたのですが、脊髄反射じゃないですけど、話を聞いているうちにほだされてしまいまして、この高校はある程度の、杉委員の言ったとおり、そのままうまく地域とともに、また分校という立場から外れて、高校として独立していただけたらなと思っていたのですが、いかんせん3校を再編する、まとめるという話で、当時はそういうふう聞いていたんですけれども、このように会議の冊子が来まして、別案として、6ページですかね、伊東商業高校と伊東高校を再編し、城ヶ崎分校と東部特別支援学校伊豆高原分校を併置するというような案もありますよというのを見まして、こちらのほうを僕は支持したいなと今は思っております。

その理由としてなんですが、城ヶ崎分校で特別支援学校の子供たちは農作業などをよくしていらっしゃるということで、それをさらに拡張して開かれた学校にするというところで、市民農園なども開放しつつ、市民の方々と一緒になって農作業にいそしむような、そういう教育現場になったらいいなと僕の中では思ったんですね。それなりの土地もありますし、拡張性もあります。そういうところで、市民の方々の作った作物

を、要はその土地を貸すわけですからけれども、その土地も安くなり、無料なり、何でもいいんですけれども、そのかわり子供たちの教育の教材としても使わせてくださいよというところで、迷惑にならない程度に使わせてくださいというような話し合いのもと、協力し合って野菜づくりをしていくような、そういう形をとったらおもしろいのかなというふうにも思いました。

また、芸術分野においても、先ほど杉委員のおっしゃられた中で、漫画甲子園ですね、2016年に全国優勝をしたりとかして、かなりの強豪校でもある。そういう実績を積まれた、分校の中でも自分たち、何か聞いた話によるとスーパー分校であるというようなことを言われるぐらい、要は反骨精神ですよ、僕自身そのとき思ったことはそれでした。分校というのは最終的にはなくなってしまうことを暗に言われている、そういう移行期間のための高校であると本人たちも分かっているんです。いずれはなくなるものだという中で、それでも何か残してやろう、一生懸命何かをつくってやろう、生み出してやろうという、そういう気持ちをすごく感じるんですよ。

その気持ちを何か消したくないなど、そういう気持ちを僕自身が持ちまして、ではどのようにこの高校を活用していくか。これは社会総がかりの教育という中と、あと今回の次第にもあります生涯教育というものにもつながってくる話なんですけれども、美術というものを、アート科ですね、よくやられているところですので、何か市民講座的なものを城ヶ崎分校でやられたりとかしながら、二回り、三回り干支が違うような人たちと生徒が一緒になって美術の勉強をしていくような、そういう中で感性が磨かれていく、そういう場にはできるのではなかろうかと。

いかんせん敷地の割に人数も少ないというような印象を受けた高校ですけれども、その中で伊東市というのはどういう場所であるかということをお考えますと、異常に焼き窯の多い、また美術館も多い、何か芸術のまちというような、そういうところなんですね。海もあり、山もあり、景色のいい、創作意欲をかき立てるような、そういう特性がありますので、また都会からリタイアしてきて余暇が十分にあるような、そういう方たちが、昔は普通科を出て、進学校を出て、それで社会に出て、リタイアして、その後に芸術を学びたい、また農業をやりたいといったときに、この高校がその後押しができるような、そういう場所になれば、この城ヶ崎分校というのは残してもいいのではないかと僕自身は感想として思いました。以上です。

矢野委員長： ありがとうございました。
 それでは、竹原さん、どうぞお願いします。

竹原委員： 私は午前中だけ参加させていただいたので、城ヶ崎のほうは何えなかったのですが、それだけで感想を述べさせていただきます。

高校生が、山桃の実が地面に落ちて赤くなってとても汚くなって、いつもそれはマイナスの風景なんですね。それをプラスに転じて、ホテルのケーキを提案して、おいしくいただいてきましたけれども、一つの子供たちの発想が学びとして、そして地域とつながるという場面を見て、商業高校にはそういう可能性、実践がたくさんあるということが分かりました。既にそういう探究的な時間を過ごしている商業高校の強みと普通科の強みを合わせることはとてもいいことではないかと思います。

これから人生100年時代で、教科書に載っていることだけでは生きていけない時代になったときに、実社会、産業界や農業や漁業や様々などところとつながって学んでいける資産・財産が伊東にはたくさんあるのだということを学ばせていただきました。

多分、卒業生、同窓会の方々もそういう産業界で活躍していらっしゃる方だと思いますので、その方たちとつながることでより学びが深くなったり、広がっていったりということがありますので、可能性のある新しい構想ではないかと思って帰ってまいりました。

中・高生時代に深く地域に関わった人たちは地域に戻る可能性がとても高いという学術研究を聞いたことがありますけれども、やはり通り一遍の一日だけの職場体験ではなく、もっと深く様々な方と接したり、地域に貢献したりする活動が高校の中であれば、それは次のまちをつくるのではないかなと思って帰って参りました。ありがとうございました。

矢野委員長： ありがとうございます。

私も参りましたので少し感想を申し上げますと、統合して成功した例もあるんですね。駅南にある駿河総合高校でしたか、ここはそういう意味では成功した例だと思います。普通高校、商業高校、それと特別支援学校が一緒になって共生・共育ですか、ともに生きる、ともに育てるといふ、それが実践されている姿を見まして、いいなと本当に思いました。障害者でない高校生たちが障害者と一緒になって学んで、お互いに気持ちを通い合うということは本当に素晴らしいことでありまして、体育館でスポーツに興じているところとか、いろいろと見学しましたけど、静岡県としてはいい教育をやっているなという印象を持ったわけですね。

そういうところもあるし、今度の伊東市の例のように、今お三方からお話があったように、特徴のある多様性というのをどうやって生かしていくかという配慮がやはり教育という場では必要ではないか、大きければいいということではなく、大きいことのメリットは分かるのですが、小さな特色を生かしていくと、ある程度時間との関わりがあると思いますけれども、何年それが維持できるかということはあるにしても、そういう配慮をして、いい面を潰してはいけないということもまた確かですね。そういう意味で、ぜひ色々な選択肢があるということを個別のケースで判断していくべきだろうと私は思った次第です。

それでは、皆様から自由な御意見をいただきたいと思ひます。

これはぜひ一度見たいとおっしゃる方があったら、また計画しますけれど、とりあえず皆様を代表するというわけではないのですが、それぞれの分野の方が一緒になって見に行った結果は以上でございます。

皆さん、一般論でもよろしいですけど、いかがでしょうか。

私、少し質問しますけれども、資料の4ページに、説明会を多くやってこられて、教育委員会が中心になって大変努力しておられる姿は分かるんです。この中で下から6番目5月24日の説明会というのが東部特別支援学校伊豆高原分校保護者とありますけれども、どのようなことが論議されたのか、御説明願えますか。

事務局： 特別支援教育課の伊賀です。

この日には、伊豆高原分校の保護者の方に新構想高校のことについて説明をいたしました。

保護者の中からは、共生・共育という考え方については賛同を得られたと思いますが、心配なこととして、新しくできる学校が施設的に十分な広さが整うかどうかというところの心配の声は上がりました。

矢野委員長： 地元にはいろいろな意見、賛否両論があると思いますが、ちょっとその賛否両論について、どなたか御説明いただけますか。特別支援学校だけに限らず、全般についてお願いします。

事務局： 高校教育課、花崎と申します。よろしくお願ひいたします。

まず、資料で申しますと6ページ、別案のほうですが、新構想高校は伊東高校、伊東商業高校、共生・共育は城ヶ崎分校と東部特別支援学校伊豆高原分校、こちらのほうの御意見につきましては、やはり特別支援学校は高等部までゆったりとした雰囲気の中で生徒を育てるべきというようなお声をいただいております。

また、特別支援学校の子供たちを守る、また安全性を確保することが大事なことで、このような御意見がございました。

それから、閉鎖します城ヶ崎分校、こちらは高校なんですけど、こちらにも不登校ぎみの生徒が存在するということでありまして、大規模な学校に通うことになれば、ひきこもりになってしまう生徒が増えるのではというような危惧を懸念なさっている声も伺いました。

逆に、5ページのほうですけども、共生・共育を全ての学校で行う、こちらについては、特別な支援を必要とする子供たちの将来も考える必要がある、その将来の利益というのは子供たちの自立である。小学校から中学校、それから高校に上がるたびに少しずつ刺激を増やした環境に置くことも必要ではないか。これは、福祉関係の就職、こういった子供たちの就職を受け入れている、そういった方から伺った意見でございます。

それから、大規模な高校、5ページのような学校にするのであれば、特別な支援を必要とする生徒がいる場合は、逃げる場所であるとか避難できる場所、こういったものは確保すべきではないかというような御意見、そして、教員からは共生・共育を新構想高校で実施したいと、これは伊東商業高校、伊東高校の先生方からいただいた御意見です。教員がいじめ等が起きないような環境づくりをしていくよう努力をしていくと、このような声が上がっております。

従いまして、5ページ、6ページ、両方とも御意見が出ているというような状況でございます。以上です。

矢野委員長： この計画によりますと、伊東地区は、令和5年度ということですから余り時間的な余裕がないと思うんですね。ほかの学校に比べるとかなり前倒しで計画がなされていますが、それだけになお一層やはり地元、保護者の方々の意見をよく聞いて進めていくということが大事だろうと思います。

マリ・クリスティーヌさんどうぞ。

マリ・クリスティーヌ委員： 私も前回、前々回も休ませていただいて済みませんでした。

この話は最初から聞いていないんですが、今日の話も含めてなんですが、話を聞きながらちょっと思い出したのは、バリ島にグリーンスクールというのがありまして、自然環境の中で生活する学校を2000年の半ば頃に建てられているわけなんです。そこにはジェーン・グドールさんという、ずっとオランウータンとゴリラと一緒に生活している彼女とか、あとグンター・パウリとって、以前、国連大学にも、日本に来られていたりしていたんですが、結局これからの教育の中で、やはり自然環境とか持続可能性とか、私たちが今生活している中ででも消えていく職種というのがたくさんある中で、子供たちが今まであるこういう形の学校の中で学んでいても、本当に彼らにとってみれば将来性があるのかどうか。ですから、将来に備えられるような色々な技術を身につけるとするのは、商業高校と名前に「商業」とついているだけに何か物すごく捉われてしまうと、結局新しい発想って出てこないと思うんですね。

ですから、それこそ伊豆半島にある学校であるだけに、自然環境とか、そういう微生物とか、それこそ農業とか、生きていくという力を備えてもらって、その中にはそうやって色々な方々の手が必要とされる、人々も一緒になってどういう新しいコミュニティーをつくっていくのかということをごちらから発信する、むしろ今までになかったようなパイロットケースをつくって、それで未来に向けての教育をしていく。高校をどのようにこれからつくっていくかということで、今お話があった中で、私は知らなかったです、分校というのはずっと存続するものじゃないから分校だということ、私は全然そういう意識もなかったんで、ただ人が多くなったからまた増やしてつくって分校になったという感じな

のかなとは思っていたんです。

ですから、そういう概念をまず一回切り捨てて、伊豆半島は、それこそジオパークなど自然環境がたくさんあって、新たな次の世紀に必要とされるような学びは何なのかということをつくるすごくいいチャンスだと思うので、そういう視点からスタートしていただけると、もっともっとみんなに役に立つ環境になるのかなと思いました。

矢野委員長： ありがとうございます。
池上先生、何か御意見ございますか。

池上副委員長： 基本的には、現場を見ていないので、私はこの件に関して、今日は発言は控えておこうと思っていました。

一方で、片野さんの発言には非常に共感するところが多かったです。スケールメリットだけを求めていくのではなく、分校であることによって生まれる生徒たちの気概というようなものは、やはり教育の場において大事にしなければいけないことなんだろうなと私も感じます。その中身はどうかということについて、私は現場を見ていないので、これ以上の発言は控えますけれども、子供たちの思い、それを酌んだ片野さんの御発言の重みを、今日、私たちはしっかりと共有しておく必要があるのではないかと感じました。

矢野委員長： ありがとうございます。
山本さん、お願いします。

山本委員： アートについて、どういう方が指導しているんですか。

片野委員： 指導も、美術に関しては教員の方の指導だと思うのですが、たしか陶芸に関しては地元の有名な方がやっているみたいです。

あともう一つが、僕が感銘を受けたのが、デジ絵というんですか、僕も全然門外漢なものでさっぱり分からないんですが、パソコンをキャンバスにして絵を描くということで、物すごい機材を所有していらして、それで子供たちはそれをいとも簡単に操作しているんです。

それは、専門学校に行くにしろ何にしろ、即戦力になるということなんですよね。そういうものを学ばせているというのは、ほかの高校、少なくとも静岡県下においてはほぼないのかなと、僕の中では今のイメージですけどあって、これをもう少し伸ばしていけば、本当に全国から人が呼べるのではないかと僕は思っています。むしろ世界からも呼び込めるんじゃないか。漫画は世界の文化にもなりつつある、日本の文化は世界の文化じゃないですけど、漫画は日本の文化でもう確立しているようなところがあるので、そこを伸ばせるのかなとも思うんです。それを伊豆半島発信でできたらおもしろいなと思います。

山本委員： いい選手が育つためにはいい指導者が絶対に要と思うので、それでいい環境が、そういう刺激がある環境があって、そういう子たちが出てきて、ちょっと話がずれるんですが、一つのアイデアとして、漫画はビジネスとしてすごくお金が儲かる。要するに、どんなにいい勉強をしても、仕事につながっていないと、それでは生きていけないわけですよ。

サッカー選手が何を頑張るって、それはもう世界最高峰の、例えばメッシが一番世界中のスポーツ選手の中で給料を稼ぐからですよ。そのためにみんな必死になってやっているわけで、そういう漫画のすばらしい、例えばそういう環境があるんだったら、漫画の会社を税制優遇して学校の隣に持ってくるとか、いつも刺激をさらに受けられるような、仕事につながっているということをもっと一体で育成、小学校、中学校、高校生から、その隣にそういう大手の何か描く人たちの刺激を受けられるとかということも一体でやれば、それは毎日がその子たちしか得られない刺激によって成長していくのではないかなと思います。

教えている程度では一流にはなりませんからね。気づいて自分でやる子しか一流にはなりません。一流になった選手たちは、世界で活躍するような子は、十三、四でエリート教育というプログラムで来たときに、何か本を読んでいるから何で本を読んでいるんだ、と言ったら、僕はセリエでやるんでイタリア語の勉強です。英語の勉強です。4大リーグのどこに行こうかによって、イタリア語かスペイン語か英語かフランス語か、やっています。そういうことをやらされている程度の人是一流になったのは見たことがありません。だからそういう子たちが刺激さえ与えていけば、何で描けるんですかと、そういういい質問をしてくるような子は一流になりますよね。そういう刺激を、分校の特徴とかを生かせば、おもしろい発想で。どこか呼びましょう、会社を。そんなことができればいいんじゃないかなと、ちょっとふと思いました。

矢野委員長： 大変いい御意見をありがとうございました。
渡邊先生、いかがですか。

渡邊委員： 皆さんの発言が、御意見がすばらしいので、ちょっと感動しております。

ただ、ちょっと意見が、今、現実に伊東高校を中心にした、そういう体験談のお話を聞いて、いや、静岡はこういう高校生を育てる環境というのが、伊東ばかりじゃなくて、まだあるんじゃないかと、山あり谷ありのこの自然環境の中では。実際の自然環境を生かしながら、そして子供たちのやる気を起こしていくことで、まだ無限にあるんじゃないかなということの希望を非常に大きく思った次第です。具体的にはちょっと何ということと言えないんですけども、何かわくわくしてくる感じで

す。

こういうところに本当に人間教育があるんだなと思いますし、静岡って、そういう環境があるんじゃないかというふうに思います。

矢野委員長： ありがとうございます。

川根の高校は、県外からの受験生が出てきたということでニュースになっていましたね。そういうふうに県外、先ほど言われたように海外からもここを目指そうという役割をしたら大変なことですね。色々と夢に見たくなるようなお話を伺って、大変ありがとうございました。

今日の議論はここまでにしておきたいと思いますが、私は皆様から得た御意見を総合教育会議の場で報告をしたいと思います。

画一性と多様性をどうやって両立させるかということが、やはり教育施策の弾力性を高めるものだし、それぞれの子供たちの意欲を高め、教育レベルを高めていくことになるだろうと私は思います。

それでは、次のテーマ「生涯にわたり学び続ける教育の充実」に移ります。

まずは、配付資料について、事務局から説明をお願いします。

事務局： 事務局から説明いたします。

本編の資料の8ページを御覧ください。

資料2に、本日のテーマの論点を記載してございます。

技術革新やグローバル化のさらなる進展等により、様々な変化が予想される中、誰もが生き生きと活躍し、豊かで安心して暮らせる社会を実現するためには、生涯にわたり主体的に学び続けられる環境の整備が必要です。

生涯を通じて才徳兼備の人材を育む教育を推進していくために、論点として、事務局から次の2点を御提案させていただきます。

1つ目の論点は、「確かな学力の向上」でございます。

確かな学力の向上に向けて、新しい時代に必要となる資質・能力を育成し、きめ細やかな教育を進めるためには、具体的にどのような取り組みが考えられるか、御意見をいただければと存じます。

2つ目の論点は、「ライフステージに対応した教育の充実」でございます。

それぞれのライフステージにおいて、誰もが必要な知識・技能を身につけ、自らの可能性を最大限に伸ばすことができる教育を実現するために、具体的にどのような取組が考えられるか、御意見をいただければと存じます。

なお、この2つの論点につきましては、それぞれの検討の視点を記載してございますので、この検討の視点も御参考にしていただければと存じます。

次に、別冊の参考資料を御覧ください。

まずは、論点1「確かな学力の向上」に関する資料です。

7ページを御覧ください。

確かな学力の向上について、県の取組事例をまとめてございます。

8ページを御覧ください。

静岡式35人学級編制の充実についてでございます。

平成28年度までは1学級の人数の下限を25人と定めておりましたが、平成29年から段階的に下限を撤廃し、平成31年4月に全学年の下限撤廃を完了いたしました。

9ページを御覧ください。

総合的な学習の時間では、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくために資質・能力を育成することを目指しております。

10ページを御覧ください。

魅力ある学校づくり推進事業についてでございます。

本事業では、技芸を磨く実学の奨励、知性を高める学習の充実、グローバル教育の推進により、県立高校の三道の鼎立を図っております。

昨年度は、12ページの記載のとおり、民間熟練技能者を活用した指導、県内大学における専門教養講座の受講、地元自治体、企業、市民等との連携による地域の課題把握と改善方法の提案、イングリッシュキャンプの実施等を行いました。

13ページを御覧ください。

来るべきSociety5.0に向け、「人間の強み」を発揮し、AI等を使いこなす人材育成を促進するため、先端技術を活用した学校における学びのあり方の変革を図ってまいります。

今後の取組として、外部有識者等の参画も得ながら、授業改善に取り入れられる先端技術などの検討及び試行を行い、ICT活用と人材育成を推進してまいります。

16ページを御覧ください。

小学校英語教科化への対応では、研修を通じて教員の指導力及び英語力の向上を図るとともに、外国語教育の推進者を育成することで、外国語教育における小学校から中学・高校までの一貫した学びを実現しております。

17ページを御覧ください。

全国学力・学習状況調査についてでございます。

小学校6年生及び中学校3年生を対象に、教科に関する調査と生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査を実施しています。

18ページを御覧ください。

全国学力・学習状況調査を活用した取組についてでございます。

本県では、全国学力・学習状況調査後の自校採点による実態把握や分析に基づき教師用コンテンツを配信するなど、授業改善を図っております。また、結果公表後においても、学力向上連絡協議会において課題に

対する有効な方策を示すなど、W-P-D-C-A改善サイクルの実施により学力の向上を図っております。

19ページは、全国学力・学習状況調査を活用した具体的な取組内容を示しております。

20ページを御覧ください。

調査結果の公表についてでございます。33市町全てが、実施要領に基づき結果分析や改善方策等を公表しております。

21ページを御覧ください。

平成30年度の全国学力・学習状況調査の結果についてでございます。

2の(1)の学力に関する調査では、それぞれの問題数を100点に換算したときの割合で表示しております。

22ページに参りまして、(2)学習状況に関する調査結果を示しております。

23ページを御覧ください。

論点2. ライフステージに対応した教育の充実にに関する資料、大学などにおける社会人の学習に関する考え方についてでございます。

内閣府が実施した生涯学習に関する世論調査によりますと、大学を出て一度社会人となった後に大学などの学校で学習したことがある、学習してみたい人の割合は36.3%となっております。社会人の大学などで学習に期待する成果は、「幅広い教養を得ること」のほか、「資格を取得すること」「特定分野の先端的・専門的知識を得ること」などが高い割合となっております。

26ページを御覧ください。

26、27ページは、ライフステージに対応した教育の充実について、県の取組事例をまとめてございます。

28ページを御覧ください。

静岡県生涯学習情報発信システム（まなぼっと）についてでございます。

I C Tを活用し、県民のいつでも誰でもどこでも、生涯にわたって学び続ける意欲を高めるため、子供から成人までの学習情報を一元的に提供しております。

29ページを御覧ください。

しずおか県民カレッジ開設事業についてでございます。

多様化・高度化した成人の学習意欲に応える学習情報を提供するため、県、大学、民間教育事業者等が行う講座等を集約し、インターネットを通じて情報提供を行っております。

31ページを御覧ください。

県内高等教育機関における社会人への学習機会の提供についてでございます。

社会人を対象とする学習制度として、社会人特別選抜入試や社会人聴講生などの各種制度を定めております。また、ふじのくに地域・大学コ

ンソーシアムでは、静岡の地域資源を生かし、魅力発信につながる研究内容をテーマとして、複数大学の連携による公開講座を実施しております。

32ページを御覧ください。

職業能力開発短期大学校の設置についてでございます。

グローバル化や科学技術の進展に対応できる技術人材を育成するため、沼津技術専門校及び清水技術専門校の教育内容を高度化し、短期大学校を設置いたします。「現場に立って、自ら考え、行動できる人材を育成」を基本理念に、令和3年4月に開校予定です。

34ページを御覧ください。

平成28年度に策定した第10次静岡県職業能力開発計画を着実に推進し、県民全体の活躍促進及び技術・技能尊重の社会づくりに取り組んでいます。

35ページ記載のとおり、主な取組として、オーダーメイド型の在職者訓練、企業とのものづくり人材育成協定の締結による在職者訓練などを実施しております。

38ページを御覧ください。

38ページからは、新産業に係る人材育成についての資料です。

38ページは、医療機器開発をリードする中核人材の養成、40ページは、新規機能性食品等の開発を行う人材の育成、41ページは、レーザーによるものづくり中核人材の育成の取組についての資料です。

42ページを御覧ください。

高等教育機関における小・中・高校の連携についてでございます。

ふじのくに地域・大学コンソーシアムでは、高校生に、高校と大学との学び方の違いを体験する機会を提供するため、大学教員による高校への出前出張講座や、大学生による高校生とのワークショップを開催しています。また静岡県立大学、静岡文化芸術大学では、小・中学生を対象として、キャンパスツアーなど大学を知る機会の提供を行っております。

43ページを御覧ください。

理数科や職業系専門学科等を設置する高校と大学との連携を一層強化し、高校生に高度な学問の一端に触れたり、研究体験や活動を行ったりする機会を提供しております。

次に、44ページから51ページにかけては、県教育振興基本計画における生涯にわたり学び続ける教育充実に関連する施策と、その位置付けについてまとめてございます。

以上で、事務局からの説明を終わります。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

ただいまの事務局の説明に対して、これから皆さんに御意見を伺うわけですが、説明内容について質問がございましたら、その中でお触れい

ただければと思います。

この資料2の論点整理は、見ていて思うわけですが、この確かな学力の向上の中に、全国学力・学習状況調査の効果的な活用という一文がありまして、これは去年ここの場でも少しだけ意見交換して、来年度、すなわち今年度しっかり議論しようということになったテーマでございます。ですから、皆様の御意見を伺いたいと思います。

あとほかのことについては、折々議論もなされていましたが、関係することばかりですので、御意見を賜りたいと思います。

生涯学習という言葉がありますし、それは本当に一番大事なことですけれども、それに対応するような教育の場を設けると。学習したいという意欲のある人は、そういうライフステージにおいて学ぶ場があるということが大事だと思うんですね。そういうものの一環として、今日初めて触れられたんですが、実技の短期大学校をつくるというような構想が具体化して、進行しているということでもあります。

それでは、ただいまの資料2に基づきまして、皆様の御意見を伺いたいと思います。御自由をお願いいたします。

マリ・クリスティーヌ委員：

生涯学習ということの中で、私いつも本当に昔から思っているんですが、大人になってから大学に戻りたいとか、また資格を取りたいとかというので、日本はすごく資格の社会であって、何検とかいうのをみんな取りたがるじゃないですか。今は最近そうでもないんですけど、昔は、お花とお茶の免状さえあればお嫁に行けるみたいな感じの勉強の仕方とか、勉強するのがとっても好きであるにもかかわらず、そういう努力をしたことによって、単位が取れないというのがすごくもったいないような気がして、私は日本の教育というのは受けたことがないので、日本の中での。ですから、欧米的な考え方かもしれないんですけども、私は大学卒業してからも大学院に行って、また自分は勉強したいとずっと思い続けてきたので、一生生涯学習だと思っていたわけなんです。

今でも、例えばインターネットでe d Xというアプリがあるんですが、そのe d Xに登録すると、何でも世界中の大学で講義を受けられるんです。それで、なおかつ幾らかお金をお支払いすると、単位をくれるんです。それをずっと自分で持っていて、その単位の蓄積によって自分はどこかの大学に最後これだけの単位を取りましたと、卒業したいので、論文を見てくださいということが入ることができる仕組みになっていて、それとかマスタークラスというの、またアプリで別にあって、同じことをやっているんです。

これだけ勉強されたい方とか、生涯学習をされている方々と、あとカルチャースクールがあるのにもかかわらず、単位として認めてくれる大学が、日本ってないんですよ。だから、むしろ静岡大学とか、そういう日本の静岡県が、ほかのところからの単位だったら認めてあげますと、それで卒業も、証書も差し上げますと。最後は、ちゃんとペーパー

一か論文か何かを書いて、自分のレベルアップができるような何か目標というものが欲しいじゃないですか、ただ勉強しているだけではなくて。だから、何か生涯学習で今までにないような形の結果が出て、もらえる。最近、色々な大学院にまた戻っている社会人がいらっしゃるわけじゃないですか、定年退職された後に。それでちゃんと卒業していますけれども、非常にそういう点ではハードルが高かったりするので、なかなか試験も通るのが大変なので、単位というものがすごく大事だと思うので、そういうことを何かいい仕組みを考えていただけたらいいのではないかと思います。

矢野委員長： ありがとうございました。
 ただいまのマリさんの御意見について、白井先生、何か御意見ありましたらお願いします。

白井委員： ありがとうございます。
 単位については、例えば他大学で受講した単位を認めることについてはしてはいるんですけども、正規入学した人にしかありません。例えば、静岡大学に3年生で編入したんですけども、もうよそのところで勉強していて、そこで受講したものを、単位を認めてくださいという単位認定というのにはしているんですけども、2単位とか、4単位とか、あちこちで勉強したものを非正規入学者に認めるというシステムはありません。そういう意味では、余り柔軟性というのはないかもしれません。

 あと生涯学習ということで、ちょっとせっかくなのでいろいろお話したいことがあるんですが、例えば、今、静岡大学の大学院でも定年退職後の修士課程の入学の方が割といらっしゃるって、本当に勉強したいと思いつつながら定年を迎えられたんだらうなという方がたくさんいらっしゃいます。でも、やはり大学の入試は、レベル的というか、受験勉強がとても大変なので、何かそういうところのバックアップがあったらいいのになとは思っていて、独学で大学院に入学するというのもとても大変ですし、何かその橋渡しをするような仕組みがあったら。今、リカレント教育とかも言われますけれども、職場から学びへというときの、職場と学びの溝があって、そこを何か埋めていけるような塾的なものだったりとか、講習だったりとか、何かそういうことができれば、もう少し橋渡しがしやすくなるのかなと思いました。

 あと、生涯学習ということでは、託児所が静岡県内の大学とか、高校には十分ではなくて、子供を育てながら30代で高校を卒業したいとか、大学に通いたいというときに、託児所のある高等教育機関も限られていますので、そういったところの整備というのもあったらいいのかなというふうに思います。以上です。

矢野委員長： ありがとうございました。

単位の問題は、大学コンソーシアムの先生方がいろいろと苦労していらっしゃると思うので、そういう場でもいろいろ論議していただくといいかもかもしれませんね。どういう学習だったら単位として認められるかというようなこともあると思いますし、非常に大事なテーマであります、少しそういうところでもんでいただいたらどうでしょうかね。

他にいかがでしょうか。

池上副委員長： 話題が大学の単位ということになっているので、大学の側から少し発言させてください。

理想的には、学位を取る学びというのがあるべき姿だというふうに思います。私どもの大学においても、定年退職した方が修士課程に入って来られたり、あるいはその先、他大学の博士課程に挑戦したりという方も、決して多くはないけれども、出てきています。一方で、全ての社会人の学びが学位を取る学びにつながるべきだというのは、なかなかハードルとしては高いのかなと思います。つまり、そうすると100・ゼロになってしまいかねない。

そこで、例えば本学においては、社会人専門講座という枠組みがございまして、単位を出すというのとはちょっと違うんですけども、幾つかの科目を学び、あるプログラムを修了した暁に証書を出すというような形の学びを制度として持っています。今現在は、外部機関が担うようになってしまったんですが、本学の特色の一つであるアートマネジメントについて幾つかの科目を受けて、またゼミナールのようなこともやって専門的な学びを深める。現職の文化財団等の職員等は、修士課程に入るというのはいろいろな意味で厳しく、物理的な制約が多いけれども、土曜日・日曜日はワークショップなどを通じて専門性を深めるというような学び方で、かなりニーズがあったんですね。

ところが、ここからが大事なんですけども、それって、大学教員がものすごくブラックな労働をしないと実現しない枠組みなんです。つまり、昼間の授業をやって、さらに土・日、そのときは岡山に行ったり、札幌に行ったりとなって、体力的にも気力的にもぎりぎりですべてに耐えていたということがありました。もし本当に静岡県がそういった社会人の学びに耐えていきたいと、また正規の学位を取るプログラムに入るにはなかなか厳しいけれども、単に1回限りの公開講座を受けて終わりじゃなくて、専門性を深めた学びを県が提供したいというのであれば、少し大学のリソースをうまく使うようなやり方について、少し予算的な措置もしながら、制度を運用していくというやり方もあるのかなあとと思います。幸い、静岡県はふじのくにコンソーシアムがありますので、そのコンソーシアムが議論の共通のプラットフォームになっていく可能性もあるのかなとも思っています。

つまり、私の今言いたいことの一番のポイントは、単発の公開講座を受けるというのではない学びを求める人に、現状では社会人入学とか、

大学院入学という非常に高いハードルしかないので、専門性を持った、ある種の社会人が受けられるような専門講座をうまく県でバックアップしていくような体制ができないだろうかということです。

矢野委員長： どうもありがとうございました。
山本さん、どうぞ。

山本委員： シルバー人材の皆さん、定年された後とかに結構活躍していただいて、例えば庭師、庭のシルバー人材の皆さんとかって、すごくきっちりとして、僕もやってもらっています。例えばサッカーでシルバー人材センターみたいなのがあれば、子供たちは、特に幼稚園生、小学校1・2年生とか、そんなに一生懸命試合をやらなくても、週に1回の練習でよいです。若い指導者は、それはそれで教えることはできるんですけども、やはり経験があって、孫のように子供たちを優しく、一流になるかどうかわからないですよ、6歳ではね。その子供たちを、サッカーを好きにさせるというのに一定の資格が、例えばサッカー協会のライセンスを持っていたら、シルバー人材センターへ登録してください、何日行けますか、この幼稚園に行ってサッカーを教えてくださいと行って、子供たちがみんな体を動かせるかというのを、それぞれで人材センターみたいなことで、それが、自分が社会の役に立っている、子供を育てている、未来につながっていく、その子の成長とともに新たな生きがい生まれます。

100年時代ですから、70でサッカーを教えてもワールドカップで優勝する選手を見られるかもしれないみたいな、そういうぐらいのシルバー人材センターみたいなことで役に立って、社会に関われるみたいなことの方でまだできることがあるじゃないですかというほうが、75歳でワールドカップを普通にぴんぴん見に来る人はいっぱいいるんです。4年に1回の楽しみのために俺は働いているんだみたいな人はいっぱいいるので、そういう何か自分の好きなこと、得意なことで社会に関わってもらうようなことは大事なのかなというのは、今のお話の中の延長線のシルバー人材センター、サッカー版みたいなのはぜひやりたいなと思っておりますのが一つです。

もう一つは、最大限伸ばすことができる教育ということで、一人一人の能力を最大限引き出せるかどうかというのは、もう間違いなく環境と指導者に関わってくると思うので、例えば日本代表が昨年ロシアで決勝トーナメントに行きました。ヨーロッパと南米というワールドカップで優勝経験のある国以外では、日本とメキシコだけです。これは、人をしっかり育てているからこういうところに来たということで、一つのヒントは、そのときのスタメンが大迫君、高校サッカー選手権に出ていた。乾、長谷部もそのグループですけど、柴崎とか、長友とか、昌子とか、川島もそうなんですけど、こんなにJリーグがあるのに、ほとんどが高

校サッカーってどういうことなのかと。

これ全てじゃないですけど、一つは、高校サッカー選手権の本番、1月に、とてつもない強度の中で、寒いですから、すごくハードに動ける、それを連戦でワールドカップの日程のようにやった、この12月、1月をやったかやらないかというようなことの差が見える人がやらないと、その差すらわからないということです。

昨日までインターハイで沖縄に行っていたんですけど、4月に青森山田と大津、プレミアリーグというのがあるんですけど、18歳以下の。このプレミアリーグに両方とも、クラブももちろん入っているんですけど、参加している両チーム、日本の最高峰です、その世代ではね。その試合を4月に見て、昨日その両チームを見たら、このたった3カ月で子供たちがとてつもなく成長している。これが、この夏の7月・8月から1月になったときに、またさらに体重も増えている、技量も上がっている、スピードもアップしているということがぐんぐん来るわけですね。それが、残念ながら11月で負けてしまったようなところは、なかなかそこにたどり着くのは、個人で頑張れば可能性はあるんですけど、実際データを見ていくと、その刺激が足りないのかなという、その伸びです。そこを見られるような、これが23でやっているんではもう全然手おくれで、その世代ごとに、13、14、15、16、17、18ぐらいのところを、毎日毎日をどうできない経験をさせて伸ばしていくかという、それを、本物を見られる人が重要なんだろうというふうには思います。

そんな小さな差を、この仕組みをつくるのが大事なことだと思うんですけど、その指導者の育成をどうしていくかということは、それぞれのところで大事なことで、そういう勉強をしたい指導者はいるので、そういう指導者の研修の仕組みとかというのを充実させるということは大事なかなと思います。

矢野委員長：　そうですね。確かに指導者の育成が本当に一番大事なこともかもしれませんね。

マリ・クリスティーヌさん、お願いします。

マリ・クリスティーヌ委員：　今ちょっと授業をやる話で、ちょっとだけありましたので。

私が受けたe d Xのコースは、持続可能な社会のあれで、東大がやっているんですよ、その授業、英語で。それで外国人もみんな見られて、英語でやっているの。それで、東大からではないんですけど、このe d Xプログラムで単位をもらえているので、ですから、そういう点では、私はむしろそういうのを独自に、何かやれるような、大学のほうはいろいろと難しいかもしれないんですけど、やりたいと思っている方々にとって、ハードルをもっと低くして差し上げれば、いいプログラムってできるんじゃないかなあと思うんですけどね。

矢野委員長： ありがとうございます。
埴先生、いかがでしょうか。

埴委員： 先ほどのそれこそ一旦定年を迎えて、それからさらに大学へなんていう、こういうケース、私の学校でも見られます。2通りあるんですよね。1つは、単位、学位が目的でないと。こういう方は社会人講座、大学のほうへ出かけていきます。こだわる方というのは、非常勤という形で身分切りかえして、それから大学院へ入学するという、このパターンですよね。

いずれにしても、それぞれの人生の中でどう活用するかという目的意識で、それは差が出ているのかなというふうには思います。それにしても人生100年、たかだか100年ですよ。その中で、人類の英知、膨大なものの質と量をいかに学ぶか。たかだか知れていると思いますよね。学はもってやむべからずと、まさにその言葉どおりだと思います。

いろいろなところへ、やはり主体的に関わっていく力を子供たちにも身につけさせてほしいなと思います。できる限りあちこちへ顔を出して、場面場面で御注意いただくとか、御指導いただくとか、私なんか、この年でもあちこちから注意されます。笑い事じゃないですけど、周辺への気遣いだとか、立ち居振る舞いだとか、あげくの果てには服装がおかしいだろうとか、いまだに日々注意され続けていると。生徒だったらなおさらだろうということになるんですけど、一般に先生方を見ていて、先生方は子供たちを注意しているんですよ。余り注意されないみたいなんですよ、時々どなるんですけどね。やはり学び続けることが大事ですし、やはり人間って、自分から学べば、何でもどんなどころでも入り込めるんですよ。そんな中で知識を身につけると。やはり知らない世界をかいま見えたら、すごく得した気分になりますでしょう。やはり自分でこうさらに深入りしていくわけですよ。

そんな中でいろんなことが身につくんですけど、ただ、それがいつどこでどういうふうに役に立つかわからないんですけど、ただ、学ぶことが増えれば、役に立つものも広がる。それが人生の判断材料にもなるし、やはりコミュニケーションのベースにもなるものですから、よりよい人間関係を構築するのも非常に重要なことというふうに思います。

それから、確かな学力の向上というのが一つ議題にはあるんですが、これを阻害するものというんですか、障害になるものというのが、藤枝あたりにある学校なもんですから、そこでもいろんな問題、委員会で提示されるんですけど、一つはスマホの問題。これはそこでは話題にならないんですけど、もう一つは食の問題。この辺を徹底的に改善しないと、確かな学力云々どころの騒ぎではなくなるのかなという問題意識を抱えております。親御さんたちには、弁当ぐらい、朝30分早起きして作れというんですけど、学校に食堂つくれとか、学校で弁当を販売しろとか、こんな話ばかりです。携帯、スマホについては持ち込み禁止。も

し持ち込んだ場合は、親を呼んですぐ解約させますと。それはいいんですけど、解約すると、解約はするんですよね、また契約するんですよ。だったら、どうするんだと。1年預かると。そうすると、帰ってくるなという再契約しないわけですよね。携帯の話、スマホの話をする、親御さんたち、すごい嫌な顔をするんですよ。ああだこうだ言いながら、こじつけては持たせろと。

しかし、今では何とかしてくれるんです。家庭でも相当問題になっているんですよね。携帯に向き合うということは、本当に怖いことだと思いますね。スマホに1日四、五時間向き合うと、思考力はなくなる、判断力はなくなる。文字を読んでいるらしいんですけど、デジタル文字なんていうのは、こんなの文字じゃないですよ。キーボードを打って文章を書いたつもり、頭全然回っていないですからね。やはりしっかり読む、それでないとばかになる。

それと、今の子供たちの親御さんがそうですけど、人の言葉をしっかりと受け止めない。聞く力がないんですよね。子供たちもそうなんですよ。これをいかに現場で解決していくか。親御さんたちや生徒さんたちには色々な話をしていくんですが、なかなか定着していかない。だから、現場が頑張らないとどうしようもないのかなと。

それから、いろいろ学級の生徒数についてもちょっと出ていましたけど、学力を上げるだけであれば、それこそ生徒が少ないほうがいいようにも見えるんですけど、ただ、学力差があると逆効果なんです。一番いいのは、単純に習熟度ですね。ちょうど昭和40年ごろですか、習熟度のクラス編制を、授業編制をとということを提唱した方がおりまして、教育界、マスコミから相当バッシングされまして、犯罪者扱いされました。ただ、やりようによってはかなり成果が出ます。

一番やりやすいのは、よく学力が二分されていて、フタコブラクダになっていると。これよりも、逆に底辺の子供たちだけを集めたほうがやりやすいです。しかも、習熟度は教科科目数をなるべく多く習熟度で実施するという、少しぐらい得意なものもあるかもしれないですよ。それと、いつでも上に上がれると。テストのたびに生徒の入れかえをすると。授業、いわゆる習熟度のレベルを変えていくと。これ、確実に成果が上がります。十数年で、東大ゼロから3桁まで結果を出した学校があります。こういう方法もあります。

それから、学級に1人外国人をとという話がありましたけど、これ効果があると思いますよ。効果があると思います。絶対あります。本当に小学生レベルでやっていくといいと思うんですけどね。私らは貧乏人なもので、結婚式はやっていません。新婚旅行で、周りはみんなハワイへ行くとか言っているけど、私らは静岡の駅から梅ヶ島まで歩くとか、1回ぐらい海外へ連れて行ってやろうと思って、とんでもないところへ連れていったんですよ。幼稚園児の子供がすごいですよ。ラオスあたりで訳の分からないことをしゃべっていますけど、現地の子供と話し

ていますでしょう、1週間から10日でコミュニケーションがしっかりとれているという。

本当に、それとやはり留学生が、ネイティブが1人いるということで、周りが本当に化学変化を起こします。前にもちょっとお話ししましたが、自らを省みるという大きなきっかけにもなると。ですから、なるべく留学生を受け入れてやったらいいのかなというふうに思います。ただ、色々な国がありますから、世界中、境界なく、アフリカからも、オセアニアからも、中南米含めて、アメリカ大陸全体からもと、色々なところから留学生を入れると本当におもしろいです。

ただ、色々な可能性がある留学生もあるんですが、あしなが育英会というのがウガンダにあるんですよ。1人面倒してもらいたいと言って、ある程度選抜されて来ているもんですから、本当にガリガリ君ですよ。勉強ばかりしている、くそ真面目に。体育の授業なんかを見ていると、筋力のつき方が違うんですよ。身体能力が相当高いんですよ。ところが、運動をやらないと。体育大会ぐらい走ればいいじゃないですか。ところが、陸上部に恥をかかしちゃいけないもんですから、綱引きとか、騎馬戦はやるけど、走らないとか、ちょっとおかしな子なんですけど、本当に世界中からいろいろな子供たちを受け入れることで、日本人の子供たちも随分変わっていきます。全く言語が理解できなくても、一言二言で声かけ始めるということからスタートします。

それから、先ほどのアフリカからの留学生は別として、これまで受け入れた留学生、どうして日本に関心を持ったか。共通していることがあるんですよ。先ほど漫画という話がありましたよね、漫画かコスプレなんですよ。そこから日本に深い関心を持ち出して、そのうちに本来の関心事はどこかへ行ってしまい、日本へ来て勉強しよう。独学でほとんど日本語を理解しています。しかも、1人の子なんかは、校長室へ来て、4月1日に。これ献本しますと言って置いていった書籍がありましたよ、手あかで真っ黒です。こんな厚い、内容は日本文化、日本の歴史です。そんな子が教室へ1人ぽんと入ったら、周りの子供たちは宇宙人になってしまいますよね。そんなこともあるもんですから、子供たちも留学生を受け入れて、本当に大きく変わっていていると。色々なことをやっていますが、地域、年齢を超えて活動させていくのが一番いいのかなと思います。

今、高校野球なんかは終わっていますけど、県大会終わりましたよね。私、常々思うんですよ。日曜日あたりも練習していますよね。地域は高齢化していますが、川掃除というのが年に2回ぐらいあるんですよ、どぶさらい。もうあっぱあっぱ状態なんですよ。そういう年寄りを見殺しにしているんですよ。ああいう姿にちょっと問題を感じますよね。

私のところは、そういう姿を見ていて、サッカー部の連中が自分たちでやろうとやったんですよ。そうしたら、今年は野球部の連中が、今度

は自分たちがやるからと連鎖反応を起こしていますけどね。グローバル化の中で、やはり地域という問題をしっかり見据えていかないとよくないと思います。

矢野委員長： ありがとうございました。
 宮城さん、学力の問題はどうお考えでしょうか。

宮城委員： ここで書かれていることなんですけれど、まず論理的思考力をともかく高めないといけないんだと思うんですが、この前も言ったんですけれども、論理的思考力というのは、結局人間というのは頭の中で言葉を回して考えているので、言葉ができないといけない。つまり、単純に言えば、日本語で生まれ育った場合は国語ができないといけないわけですね。ところが、国語って、余りみんな勉強しないし、国語ができないといけないとも余り感じないんですよね。ですから、何の役に立つのかわからないんですよ、国語って、普通。英語だと何の役に立つのか明瞭なんですけどね。だから、まず国語を何とかしなくてはいけないんじゃないかと。

これは前ちょっと申し上げましたけど、そもそも論理というのは常に会話で成り立っている。1人の人間の中で、「こうじゃないか」「いや、でもこういう考え方もあるぜ」「いや、それに対してはこうだ」という1人の人間の中での対話なので、それができるようになっていくことが大事なのかなと。

もちろん英語も大事は大事だと思うんですが、さっき山本さんがお話になっていたように、目的があれば、必ず外国語はやる気が出て、僕もそうだったんですけど、結局アメリカで演出しなくてはいけなくなったので、急に英語をやる気になった。だから目的がなく、ただ一斉にやりましょうというだけではどうなのかなと。

だから、これを使って、こういうことができるということが見えてくるのが大事なのかなと思うんですが、ただ一方で、今日本で英語ができることが称賛されるケースの多くは、例えばシンガポールの方は、いかに英語があるためにビジネスで成功しているかと、こういうことをよく言われていますよね。つまり、ビジネスで成功するということが、直接英語、あるいはシンガポールで教育を受けるということのダイレクトな目的になってしまう。単純に言えば、お金のために英語を学ぶという、どうもそこだけになっているような感じもして、そうじゃないんだと。自分たち以外の文化を知ることが人を豊かにするんだ、人生を楽しくするんだと。そのために外国語というのが、興味が出てくるんだという順番にならなくてはいけないんじゃないか。単に今の世界では、英語ができるほうが金がもうかるんだという論理になってしまっているような気がして、最近G A F Aとか、みんな英語の会社ばかりが世界でのし上がっていくので。

では、自分以外の文化を知ることが、どれだけおもしろいかという話になるんですけど、それについては、僕、割と今厳しいというか、悲観していて、というのは、例えばパスポートを取る若者が減ってしまっているとか、あとこれは盛んに言われていますけど、日本から外国へ行く留学生がすごく減ってしまったと、本当に減っているんですね。さらに、単純には解析できないかもしれませんが、音楽も、いわゆる洋楽と言われる外国の音楽を聞く若者がどんどん減って行って、日本語の歌を聞いている人が圧倒的になってしまったんですね。さらに最近では、映画市場においてもそういうことが進んでいるんです。外国のものよりも日本のもの。つまり、同質性というか、うん、分かる分かる、そうだよねとすぐにうなずけるようなものを求めるような傾向があって、特に若い人たちはそういう傾向が進行している。とても僕は心配なんです。

こういうことというのは、むしろ社会を脆弱にすると僕は思っているので、単純に言えば、全体主義のようなものの、むしろ温床になってしまうと思っているので、では、自分以外の文化に興味を持つにはどうすればいいか。それを、さっき塙先生がおっしゃっていたように、例えば留学生が入ってくるとか、本当に身近なところに何かきっかけがあれば、ああおもしろいなと思って、いけると思うんですが、そこを何か学校の中でも工夫できたらいい。異文化というものが本当に自分を豊かにする、世界が広がる。本当に世界が広がりますよね。

これ、よく言うことなんですけど、日本語だけで世界を見てみると、日本って1億何千万しかいないわけじゃないですか。ですから、別の言葉を窓口にすることで、突然何億人も、あるいは何十億人も友達というか、友達の可能性が増えてくる。こういうふうの世界が広がっていくことで、人生が楽しくなるんだなというのを、若い人たちにどうやって感じてもらえるのか、そういう窓口を学校の中でどうやって作ることができるのか。そういう施策なんかを工夫していただきたいなと思うんです。

矢野委員長： 豊田さん、いかがでしょうか。

豊田委員： まず学力のところなんですけれども、先ほど塙先生がおっしゃったような、スマホと食とかという子供の知識を豊かにするとか、そういう学力を向上させるといところ、子供たちが頑張るといのも大事だと思うんですが、やはりそのバックにある家庭だとか、保護者への理解というか、対応といのも同時に考えていかないと、これはいい先生がついていても、なかなか進んでいかないのかなと思いますし、山本さんが言っているようないい指導者といいい環境、環境といところも整えていかないといけないのかなといのも思いました。

それと生涯学習に関しては、私も今、農業と福祉の連携みたいなこと

をやっている、福祉のほうの勉強を少しやっているんですけども、仕事をしながら勉強していくというのはなかなか難しいですし、うちみたいな中小企業みたいなどころだと、そんな何カ月もスクールに通うということも絶対無理なので、今、通信でやっているんですね。そうすると、仕事が終わったら夜の時間ですよ。全部家事を終えて、8時ぐらいから眠い目をこすりながらテキストを読んで、回答して、送って、単位をもらってみたいなのをずっと繰り返して、やっと終わったんですけども、何かそういう学びの場の環境を整えるというのも、企業が少し努力してくれないと、私はちょっと自分の仕事上必要で、その資格は取ったんですけども、ちょっと興味があることをやりたいなと思っても、仕事をしながら何かを学ぶというのは、中小企業だと、なかなかそういう環境が整ってなくて、非常に難しいというところ、仕事かそっちをとるかみたいなどころで、働き方とか、自分のライフワークも考えないといけないというところもあって、今現状でいくと、なかなか多くの人にそういう場を与えてやっていこうというのは難しいのかなと思うんですけども、一方で、先ほど言ったアプリや、私みたいに通信で時間をつくってやっていくというのも可能なのかなと思うんですよ。それを知らないとできないのかなあというふうに思いました。

静岡県の「まなぼっと」なんですけど、実は少し登録させてもらっていたんです。場を与えるほうとして、ちゃの生で登録させてもらっていたんですけども、残念ながら、そこからの問い合わせというのはなくて、参加される一般の人がもう少し興味を引くような宣伝の仕方などをやっていかないと、せっかくいいツールがあっても、活用を余りされずに終わってしまうのかなというのは感じましたので、まなぼっとでも、先ほど言っていたような指導者とか、教員側になれる人っていないのかなと、生涯学習を社会人を対象にやったときに思いましたので、何かもう少し活用方法を一度検証されたほうがいいのかというふうに感じました。以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。

大分時間が迫ってきたんですけども、何かあれば、どうぞ、お願いします。

渡部委員： 前回の会議をお休みさせていただいて、参加することができなかったんですけど、その期間に香港に行っていて、「F o r b e s」という雑誌があるんですけど、F o r b e s社が選んでいるアジアのアンダー30というものの社会起業家の分野で選んでいただいて、それでアジアのいろんな国から同世代、30代未満の人たちが集まるようなサミットに行っていました。

そこには、同じ時代を生きてきた若者たちが、科学の分野だったり、医療、福祉、直面している分野が似ているところも多いので、農業、I

ITベンチャーをやっていたりだとか、食のことやセキュリティのこと、あとは学校に行けない子たちのことというのを扱っているような子たちもいて、ちょうど実践委員会のトピックが、子供たちの生きる力だったりとか、国際社会で活躍できる人材をとということだったので、それについてどういう教育を受けてきて、どういう教育がこれから大事だと思うかということ、ちょっと話をトピックとしていたんですけども、その中で、Project-based learningが大事ではないかということが出てきました。

つまり、プロジェクトを自分で持って、自分で問いを立てるところから、それを解決するところまでやっていくという、まさに今日、何回もトピックに出ていた探究心や、主体性や意思を持って関わるということだと思ったんですね。自分で問いを初めに立てるところから始めないと、どうしても受け身になってしまう。その中で、先ほどの言語だったり、スポーツだったり、本当にやる気になったときに、子供たち、学生の中でくすぶっているものをどう引き出せるかということ、大人が引き出すだけではなくて、その機会をどう与えるかということなんだなと感じました。

その中で大事だなと思って、すぐ日本でできるか分からないけど、きっと大事だなと思ったのが、ITを禁止しないこと。スマホの問題はもちろんたくさんあると思うんですけど、今、ブラインドタッチができるかどうかより、スマホのフリック入力は大人数よりずっと早いし、色々なところにアクセスしながら情報を集めるということは、かなりピカーだと思うんですね。検索能力というか、検索教育というものをどうやって受けるかという、グーグルの窓に何を打てるかということ次第で、自分が得ていく情報量というのが変わっていくということがあるので、例えばそのProject-based learningを1年間という枠を決めてやっていく中には、どんなことを自分で調べて、チームで調べていってもいいということ、何を解禁したりだとか、学校でスマホを使っていいとなったりだとか、あとはお金の教育をかなり避けてきているということを感じました。

例えばその1年間で、こういうイベントを最終的にやりたいということで、お金が必要なのであれば、お金を集めてみるというところをオフラインでやってもいいし、オンラインでやってもいいし、どうやってお金を調達して、それを使って、それに協力してくれた人にお礼を伝えるとか、例えばそういう最初のインプットを増やすみたいなことも含めて、そういう何となくリスクがあるから、やんわり禁止していた部分、実は社会人になったときに、物すごく共同の企画立案・実践というところでは必要だということと、そのプロセスで、日本語以外の言語が、これ以上は日本語でないなと思ったら絶対に検索するし、今、グーグルトランスレートを使うと、一瞬で外国の文献を幾らでも読めるので、そういう中で、また英語にも力が入ったり、国語というものを見直

したりという、たくさんの方がぎゅっと詰まっているものというのがあるのではないかとというのが、この香港のディスカッションの学びでした。

すごく大きいことに聞こえたんですが、実はもうやれている高校もある。私は静岡県富士市だったんですけど、吉商本舗、吉原商業高校の学生さんたちが自分たちで作ったものを売っていったりだとか、地域の方とコミュニケーションをとっていたりとか、あとは先ほどの伊東、伊豆の学校の例で、自然があるという舞台があるなら、それを何にするかという、あるリソースからつくり上げるということが肝だと思ったので、そういう部分をうまくやれている高校から学んだり、導入できたり、連携できたりという形が、静岡県の高校に行った子たちは、問いを立てるところから、決まった1年間とかにコミットして、それをアウトプットするところまで経験しているというふうになったときに、直接的ではないけれど、大人になったときの思考回路が深くなるんじゃないか、そんなことを思ってシェアさせていただきました。ありがとうございます。

矢野委員長： ありがとうございます。

池上副委員長： 私たちは、初等・中等教育のプロフェッショナルではないので、テクニカルなことで、こうすればいいと言っても説得力はないと思うんですね。むしろ、私たちはどうやってやる気に火をつけることができるかというところで、それぞれの分野から専門的な発言がきくと求められているんだろうと思うんです。山本さんのサッカーしかり、宮城さんの演劇しかりですね。

今日出てきている資料の42ページに、高等教育機関における小・中・高との連携という資料を大学課がまとめてくださっています。私は大学の人間なので分かるんですが、ここで言っているのは、大学の先生が一方的にしゃべるだけのことなんです。あるいは、施設を見せるだけなんです。それが、実は今ここで言っている連携では全然ないだろうと私は思います。むしろ、今、渡部清花さんが言ったProject-based learningを小学校や中学校でやる、そのときに、大学の先生や大学生がコミットしていく。子供たちの気づきにヒントを与え、子供たちは、自分で立てたプロジェクトに対して、彼らが自分の力で学ぶときに側面からサポートする。こういう関わりをする中で、やっぱり大学生ってすごいとか、本当に学びたいとか、そのためにはこういう勉強が必要だという本物の気づきがあって、そこから学力というのは伸びていくんだろうと私は思っています。

以前、磐田市の中学校で、2回連続ですけれども、多文化共生に関するワークショップを私たちのゼミ生がやりました。これは非常に深い学びで、中学校のそのときの担任の先生というのは、私のゼミ生のOGだ

ったわけですが、この子供たちがこんなに変わるとは思わなかったという言葉が発言されていたんですね。

また私自身、昨年度のDream授業を担当して、県下全域から集まった子供たちが、理想の学校をつくるというプロジェクトに対して、どれだけ本気で学び合って、すばらしい仲間を得たかというのを見てきましたので、そういうきっかけをつくるように、小・中・高と大学との連携というのができていけば、自ずと子供たちの学びに火がつくのではないかなと思います。

幸い、この場は教育委員会の方も知事部局の方もいらっしゃる場ですので、ぜひそんな仕組みを考えたいなと思います。ありがとうございます。

矢野委員長： ありがとうございます。

どうやって子供たちの心に火をつけるかですね、実に難しい問題です。しかし、それをやるのは大人の責任ですね。

藤田委員： 今のお話を伺って、どうしてもお時間をいただきたいと思って、紹介をさせていただきます。うちが、今アルバイトが380名ぐらいおまして、そのうち200名ぐらいが大学の学生さんでございます。その学生さんを毎年集めるのに、年間600万とか、700万ぐらい募集費をかけていくんですけども、いつも求人誌のところに、時給競争であったり、条件競争だったりみたいな形で載せるしかなかったところを、今年は趣向を変えてみまして、50万円あげるから、10人集まってリクルーターズとして活動してみないかということ、学生にチャンスを与えました。

4月のちょうど入学のときから1カ月間の間に、もしその10人で40人を集めたら、その50万をみんなにあげるよということで、自分で考えてみなさいと。私たちが、なかなか私も今年44ということで、2回りも違う子供たちを集めるに当たって、やはり2世代違うと大分感覚が違うということで、だったら学生が目線でみんなを集めてみないかということで、そのチャンスを渡したところ、1カ月で47名が集まりました。

私は今まで一生懸命条件を考えて、ほかのところと比べたりやっていたんですけども、彼氏・彼女たちがやることというと、ITを使って、ユーチューブをつくったりとか、全然私とは違う発想でどんどん活動して、入学式にグランシップの前でチラシを配ったりとか、私みたいなおじさんが行っても受け取ってくれないんですけども、でも、学生が行くとすぐ受け取ってくれて、1日でそれで2人ぐらい募集があったりしました。何を言いたいかというと、企業側が学生にもう少し色々なチャンスを与えてもいいんじゃないかなということをととても思いました。自分が持っている仕事が全てで、社員だからやらなければならないじゃなくて、学生にだって、別に飲食店で働いていて、料理を運ぶことだけじゃなくて、人を集めることだって学生さんの仕事であってもいい

と思いますし、いろんなチャンスを与えて、彼女たちに自信をつけさせてあげるとするのはとてもいいんじゃないかなというふうに思いました。

次の手段として今やろうとしているのは、プレスリリースを学生さんにつくってもらおうかなと思っております。今までこれも社員とか、私がやっていた仕事を、学生が目線で、なすびという会社がいいことをやっているものをどんどん投げ込んできなさいと。それに対して報酬を払うよということで、社会にいかん学生のうちに近づけてあげられるかということを考えて今やっております。

従って、こういう学校だけじゃなく、学生でいるうちにできる経験を企業と連携して、企業側に働きかけていくということも大事なのかなと思ひまして紹介をさせていただきました。ありがとうございます。

矢野委員長： ありがとうございます。

竹原委員： 今日お話を聞いて、色々なところとつながること、子供発ということが大事だということが分かりました。

企業や産業界等とつながるのにはつなぎ手が必要で、先生が全てやると大変なことになります。そのためには地域学校協働活動やコミュニティ・スクールの仕組みをきちんと入れないと、いいことだけれども、誰がやるのということになってしまうということが起こります。

それからもう一つ、子供発とも関連しますが、スマホを使うということに関して、4校の生徒会がスマホとどうつき合うかというテーマで熟議したことがあります。スマホを使った時間だけ勉強しようという提案が出たり、スマホではなく、リアルに話したほうがもっといい等の意見が出ましたが、子供たち発で提案することは子供の自発性・主体性を伸ばすことになっていきます。自ら考えること、そのために共に学ぶことは楽しいということに必ずつながると思いますので、ぜひそういう機会と増やしていただければと思っております。

矢野委員長： ありがとうございます。

だんだんと熱気を帯びてきて、これから1時間ぐらい、色々皆さんお話があると思うんですね。多分もっと言いたかったというのをいっぱいお持ちだと思いますので、まだ先長いですから、次の委員会で毎回論点というのが出されますけど、余りそれにとらわれずに自由に御意見を出していただきたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。

誠に時間超過して申しわけありませんでした。

終わりに当たりまして、知事から一言いただきたいと思ひます。

川勝知事： どうも熱心な御議論をいただきまして、ありがとうございます。
今日は、これから意見交換会があつて、教育委員会の委員の皆様方と

この実践委員会の皆様方で、顔の見える形で信頼関係ができればなどというふうに思っております。志は同じく、いかにして立派な人材を育ていくかということなわけですね。

私は、今いろいろお話を聞いていて、城ヶ崎分校のあれがおもしろかったですね、分校の話、一番おもしろかった。高校で、そういう漫画であるとか、あるいは陶芸であるとか、行きたい子はもう中学で決めているわけですね。決められない子が普通のところへ行くと。今回は静高が優勝したと。静高は学力で優勝しているんじゃないんですよ。しかも、正規の学校の入学試験で入ってきた子じゃないでしょう。その子たちは、野球でやりたいということなんです。もし、高校で甲子園に出られたと。さらにまた野球を続けたいと。そうすると、慶應でも、早稲田とか、ともかくいろんな大学で野球の強いところが引っ張りますよ。ですから、入学試験は関係ないですね。

今、仲邑董さん、小学生ですけど、あの子、確かな学力つけたいと思っていますかね。藤井聡太君は、どこかの東大とか、早稲田に行きたいと思っていますかね。それから、あと八村塁さん、彼もバスケットやりたいから向こうに行ったわけでしょう、アメリカに。決してアメリカでBAを取るというつもりじゃないと思いますよ。

ですから、もう中学ぐらいで、これをやろうと思っている子がいると。ですから、15歳、元服ですから、もう大人扱いするということ。ただし、これは必ず失敗します。競争相手がいっぱいいるし、今は世界が競争相手、特にサッカーなんかそうですよね。ですから、必ず限界にぶち当たるということで諦めざるを得なくなる。要するに、挫折をするということですね。

ですから、私は皆高校に行って、大学に行って、高校まで無償にしろとか、そういう愚かな議論がなされておりますけれども、そうした形でモラトリアムといいますか、要するに執行猶予みたいに、一人前になるのをいつまでたっても甘やかしてやっているということだったんですけど、逆に15歳で義務教育、そこまでは皆さんの大人がやっている公金で税金でしっかりとやると。徹底的にやると。あとは、決まらない人は普通高校に行きなさいと。分かっている人は農業とか、あるいはスポーツとか、サッカーとかやればいいと。しかし、失敗するということは、もうみんなそれぞれ経験がございますから、30ぐらいまでは修業時代というふうに見ておくということですね。

人生100年ということがございますので、ですからいろんな道、今はもう終身雇用では、残念ながらなくなっているもので、したがって、それを前提にできないので、道が変わるといえることがあり得ると。しかし、両親のことを考えたり、結婚したり、子供のことを考えざるを得ない時期が必ず来ます。大体30前後ですね。特に女性の場合は、そのころ、一つの考えざるを得ない時期でしょう。ということは、パートナーがいるということですよ。ですから、その前後に選択肢があると。

先ほどジェーン・グドールさんの話をしていましたけど、彼女は、恐らくイギリスで言えば、中学しか出ていないんじゃないですか。だけど、ケンブリッジのPh. D. ですよ。なぜかというと、自分でアフリカに出て、チンパンジー書いて、それで余りにその観察記録がすばらしいから、論文を書いて学位を取っているわけです。

ですから、単位を取ることも大事ですけども、いろんな道があると。そして、早く道を見つけなさいと。そして、仮にサッカーで海外に行かざるを得ないと。だったら、もうパスポート必要ですからね。パスポートが必要で、向こうに行って、向こうの言語が分からないといういろいろ苦労するから、どうしても向こうの選手や、あるいは向こうの人たちとコミュニケーションするために、それから、また自分の出身地について知るために、出身国について知るためにやる気が出てくるんですよ。だから、人間はホモサピエンスですから、必ず勉強したくなって、ああ、もっと勉強したいという時が必ず来ます。生涯学習というのは当たり前前のことで、それができない人は痴呆症になりやすいというふうに思うくらいです。

ですから、私はもう15歳で元服扱いと。それで、もうあとは勝手にやれと。そして、できれば体で身につけるのがいいと。つまり、技量を磨く実学だと。つまり、社会のために何ができるかやっごらんと、自分で何が貢献できるかと、そこの中で自分をどのように表現できるかと、やっごらんと。そして、失敗は許すということですね。もちろん学力のすごくできる子がいます。その子たちは徹底的にやらすと。大学は、なぜ高校卒業するという資格がなければとらないんですか。もう数学なんか、代数なんかは数Ⅲまで一気でしょう。ですから、十三、四歳で終わっている子いますよ。何でそんなこと、高1、高2、高3で続けてやらされるんですか。その間に女の子と恋してごらんなさいよ、数学どころじゃないですよ。ですから、何でトップガンでぱっと入れないのかと。伊東先生はそれをやるとおっしゃったんだけど、なかなか抵抗勢力が大きい。高校が問題ですよ、高校の先生が問題です。じゃあ、高校の先生の学力はどうですか。私は、さすがに12年おりますよ、ここに。高校の先生の学力、申しわけないけど、ここにいらっしゃる方って、みんな大学を出ています。その教養、それは国の役人が100とすると45ぐらいですよ、それくらい赤点です。勉強しなくて済むから。だけど、これは教養の面であって、ここでないとまかされたら、ば一とやるんですよ、余り勉強していないから伸びしろがすごいんですよ。だから、信じられないぐらいですよ。

先ほどの学力テストあったでしょう、小学校はびりけつですよ、ほとんど。中学を見てごらんなさい、あれたしか4位か5位ですよ。小学校のとき、お父さんとお母さんと一緒にあっちに行ったり、こっちに行ったり遊んでいるじゃないですか。向こう、日本海側なんていうのは遊べないじゃないですか。もう勉強する以外ないでしょう。こちらでも体力

ついているから、よし、ちょっと中学で勉強しなくちゃいけないと言われたら、そうだなあと考えてやるから、一気に40位から4位になっちゃうわけです。それは、ここの風土がつくっているんだと思いますね。この風土が向いているのは、実学だと。技芸を磨く実学、スポーツ、芸術、芸能、あるいはものづくり、そうしたところで、今、藤田君がおっしゃったんですけれども、いろんな大人が青年たちに指南というか、修業の機会を差し上げるようにすると。だから、もうお父さん、お母さんのレベルじゃありませんで、本当に社会総がかりでやると。日本の今の教育システムは、明治以降、いわゆる閾値を超えて、今、従来のあり方をそのままやってもだめだと思っております。

なるほど日本から留学する人は少なくなっているけど、この間まで20万超えましたと言ったけど、もう今は30万超えていますよ、外国から来る学生の数が。だから、うちは向こうでどこか学びたいという国ありますか。アメリカに行きたい、アメリカのハーバードに行きたいとか、そんなことを、学生が本当にいないんですかね。オックスフォード、ケンブリッジに行きたい、そうですかね、我々のころと全然違うと。こちらのほうが安全で安心しておもしろいんですよ。だから、今、日本がグローバル化していると、グローバル化していると思いますね。だから、必ずしも悪くする必要はないというふうに思っております。情報も、先生よりも小学・中学でとれるわけですから、今。だから、従来のシステムをがらがらぼんしなくちゃいけないぐらいですが、差し当たって法律違反はできないので、元服までは、徹底的にいろんな可能性があるようにみんなですて、あとは18歳で大学というんじゃないと、いつでも来られるようにしておくということで、生涯学問ですね。生涯精進という形で、それぞれの道で立派になるようにしていくのがいいと。

そういう意味で、先ほどの城ヶ崎の分校は、これを生かすというのは、君らのところは農業をやっているから、そういうところでぱんと響くんだと思うんですよ。それが一番よかったと思います。ありがとうございました。

矢野委員長： ありがとうございます。

それでは、これで今日の会議は終わりにします。

今日の皆さんの御意見をまとめまして、次の総合教育会議に諮りたいと思います。どうも今日はありがとうございました。

事務局： どうも長時間にわたり、ありがとうございました。

第3回の実践委員会は10月21日を予定しております。詳細につきましては、後日、事務局から皆様に御連絡をいたします。

以上をもちまして、第2回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を終了いたします。どうもありがとうございました。

